
勇者な幼馴染にお久しぶり。

吹雪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者な幼馴染にお久しぶり。

【Nコード】

N2454X

【作者名】

吹雪桜

【あらすじ】

勇者として召喚された幼馴染と巻き込まれた私。

幼馴染のハーレム集団に追い出された私。

何だかんだで一年半が経ちました。久しぶりー元気だったー？

誰にも喧嘩は売ってません。これ重要。

※全五話

「久しぶり、竜也」

「…凜？」

何年振りかなー？一年と半年振りー？と手を振ると、美形の幼馴染は今までどこ行ってたこの馬鹿！！と怒鳴った。

今から一年と半年前、私と私の幼馴染は異世界召喚なるものを経験した。というか、経験中。

実際に呼ばれたのは幼馴染の藤川竜也くんで、私こと綾坂凜は光の渦に呑み込まれる幼馴染をぽかんとした顔で見守ってただけだった。地面の上に右手だけが残った時に我に返って、え、え、ええ！？とか混乱して足を一步前に踏み出したら、何でだこれ。自分の足に蹴つまづいてこけた。

地面に顔面から激突！そんな状況を覚悟したのに、何故か地面はぐにやり。私を呑みこんだ。

そして気がつけば竜也と二人、いかにも何かの儀式の最中ですよといったげなローブ姿の面々に囲まれて、薄暗い部屋の中央で倒れていた。

異世界召喚もののお約束。呼ばれた人の役割は勇者か巫女か。前者は大体男で、後者は大体女。

今回は前者で、目的はこれまたお約束な魔王退治。そしてまたまたお約束なことに、選ばれた勇者様は正義感が強いときた。

私からしてみれば、自分達の世界で起きたことを他の世界の人間に解決してもらおうとかふざけんなよ、なんだけど。

しかもね？戦争も知らない子供達なわけよ。人の生き死ににも関わったこともない子供達なわけよ。その子供達に魔王を殺してくださいとか何よそれとか思うわけよ。いい年した大人が。

自分達の子供がいきなり知らない世界に召喚されて、あなたは勇者だ。魔王を殺して世界を救ってくださいとか言われたらどう思うのさ。想像力の欠如だよね。それとも自分中心な大人が多いのかな。お前達も同じ目に遭ってしまえ。知らない世界に召喚されて、勝手に役割背負わされてしまえ。

毎晩お祈りを捧げてます。

ええ。連れにはお前、それ呪い、と言われましたが、お祈りです。叶えてくれるよね？光の女神様。だってこの世界の人達のお祈りに応えて竜也の召喚に力を貸したんだもの。もちろん私のお祈りも叶えてくれるよね？

まあ、話は逸れましたが、そういうわけで、竜也はこの世界の勇者様の肩書をあっさり受け入れました。

いや、あっさりってわけでもなかったけど、内心ぐるぐるしてたみたいで、マシンガントークかまされましたが。とりあえず竜也を召喚した人達、お城の人達と一緒に過ごすうちに、竜也は俺が魔王を倒す！という使命感溢れる勇者様になりました。

が、ここで問題ひとつ。私だ。

巻き込まれただけの私は勇者じゃない。でも勇者の幼馴染という重要ポジション。一応丁重に扱われてはいた。けどそれは勇者のオプ

シヨンのひとつとして捉えられているということでもあった。
うん。つまり、私も勇者の魔王退治につきあえ的な雰囲気ですっご
いしてた。っていうか、多分これ確定事項だった。

竜也は召喚された時点で、どうやら光の女神様からいろいろな力を
もらってたみたいで、見事なまでのチートな勇者様だった。それで
もって容姿も整ってるからもてたもてた。幼馴染ってだけで側にい
る私に向けられた敵意は凄かった。

：これ、いつも思ってたんだけどさ。好きな男の子の幼馴染の女
の子に敵意丸出して、すっごい馬鹿な行為だと思わない？
だってさ、幼馴染だよ？小さい頃からずっと一緒にいるんだよ？そ
れ味方につけたらすっごい有利じゃない？恋敵いっぱいいるなら尚
更さ。

なのに見下して嘲って私の方がふさわしいのよあんななんかあの人
にふさわしくないわーみたいな態度ってさ、ただの馬鹿だよ。こ
っちはそっちの悪口いっぱい吹き込めるんだよ？あの人にこんなこ
と言われたーとか泣きつけるんだよ？出会って間もない女の子とつ
きあい長い幼馴染、普通どっち信じるさ？

もしかして美人は誰にでも優先されるとか思ってる痛い人ばかり
なわけ？

平凡な幼馴染と自分に好意向ける美人なら、美人の言うことの方を
信じるっていう竜也を馬鹿にした考えかたしてる人ばっかなわけ？

まあ、いいけど。

所詮、竜也が外見で人を信じる人間だって思われてるってだけだし。
すっごい失礼な話だよねえ。

願わくば竜也くん。アンジェリカ姫と巫女リリアンと剣士のモニカ

と魔法使いのミリーと侍女の皆さんだけは恋人に選ばないでね？ 幼馴染として絶対にお勧めしたくないから。

勧めるなら第三王女のユリカ様だなあ。いいよあの人。引っ込み思案などあるけど、私に唯一普通に接してくれた人だよ？ 二人でこっそりお茶会とかしたんだ。私の話を聞いてくれて、私の知らない話もしてくれて。あ、意外と情報通だよ。情報が自分の身を守るんだって。勉強になった。

でね、控え目な人だから目立たないけど、笑うと花が零れるみたいでね。かわいいの。あの人いいよ。すっごいお勧め。

あ、でも竜也無自覚ハーレム男だからなあ。しかもハーレム要員、いっつもあんまり好きじゃない人ばっかなんだよ。そんな人侍らしてる竜也とくつついたらユリカ様が辛い思いするよね。

やっぱなし。ユリカ様にはもったいい人いるから。絶対いるから。変な女が寄ってこない、寄ってきてもちゃんと気づいて撃退できる人がきつという。

竜也は寄ってくる女の性格の悪さに気づかないからなあ。その人のいいところ見つけるの得意なのはいいことだけど、悪いところをいいふうに解釈するのはいかなものか。何度言っても分からないみたいだからもう言わないけど。

で、何の話だったっけ？

……はーれむ。

……その前だ。何話してたっけ？

……ああ！ 私ね。私。

勇者と一緒に魔王退治、とかさ。できるわけないじゃん。何の力もないんだしさ。

でも大きな権力に逆らったらどうなるか、なんて考えるだけで怖いし。第一、この城追い出されたら知らない世界でどうすればいいわけ？

とかとか思ってたら、だ。

まあ、追い出された。

誰によってハーレム要員のお姉様方に。

お姉様方は竜也と一緒に魔王退治に行くのだとかで、そこに幼馴染の私までもついていく、なんて邪魔で邪魔で鬱陶しくて。しかも戦えないしね。お荷物にもほどがある。

そこでお姉様方は考えた。邪魔な私がいなくなれば、竜也との仲を思う存分進展させられる、と。

何しに行くつもりなんだろうね、この色惚け婆達。

私は色惚けばばあ、じゃなくて、お姉様方に囲まれて、しかも剣突き付けられて、目の前で呪文の詠唱もされて。そんな状態で置手紙を書くことを強要されました。まる。

っていうかさ、私がこっちの文字で書けるわけないっての。竜也様はお書けになるのに、幼馴染だなんだと言っても所詮その程度なのです。ねオホホとか言った馬鹿女達は竜也が言った話の何を聞いてたんだろうか。光の女神の力でチートになったんだっての。頭空っぽはこれだから困る。

まあ、そんなこんなで、なら私の世界の文字で書けって言われて。魔王退治なんてしたくありません。怖いです。私は逃げます。さようなら。

言われたとおりに書いた。

いや、お姉様方は読めないよ？読めないくせに脅してるから言った通り書いたと信じてるんだよこの馬鹿、いや、お姉様方。私が逆ら

えないって思ってたさ。

だから最後にこうも書いといた。

って書かないと殺すって言われた。もう忍耐力の限界。こんな国の言うこと聞いて誰が戦うか。あんた一人でやれ。

書き終わった途端、満足そうに笑ったお姉様方に、ほいっと捨てられた。

まあ、一応？人としての情で？幾許かの路銀はくださって？こんな大金本来ならばあなたなど手にとるのも不遜ですよ？とかお前が稼いだ金じゃないだらなことを言われて捨てられた。

人としての情ってなんだ。

知らない世界に無力の女の子をポイ捨てすることか。

大体お金もあれだよ。竜也にばれないためにあんまり城を留守にできないからって城からあんまり離れてないところに捨てたもんだから、旅に出た竜也に無一文でふらついているところにつけられるのも、ここら辺で死んで竜也に知られるのも避けたかったってだけだよ。

まあそもそも？私みたいな子供が大金持ってたら怪しいうえに、襲われて強奪されるなり殺されるなりするのが当たり前だと思うんだけど。

結局いいところのお嬢さんばかりだから気づかなかったんだろうなあ。

そんなこんなでポイ捨てされた私は、城にいた間に知り合った庭師のおじいちゃんに周辺の地理を教わってたおかげで自分がいるところがどこかは分かった。

まあ、それだけだけ。

これは路頭に迷うフラグだ。

そんなことを思ってたところに、私の前に天使様が現われた。全身黒一色の天使様だ。

肩まで長い髪をざんばらに切った、黒っていうか、闇色？そんな目と髪の色をした陰気くさい美形の天使様だった。

とりあえず何をしてるのか聞かれたから一部始終話した。

いや、何かもうこのまま見捨てられても死ぬ気がするし、話しても不敬罪だーとか嘘つきやがってーとかで殺されてもおかしくない気がしたから、ならもう言いたいこと全部話しちゃえーと。

うん。やけになってた。

でも黒い天使様はしばらく顎に手を置いて考えた後、なんとまあ拾ってくださった！

黒い天使様について旅をしながら、いろいろと教わった。お金の使い方とか、この世界の常識とか、何かもういろいろ。

その代りに私も私の世界のことを教えた。っていうか、聞きたがったから話した。楽しそうに聞いてくれるから話し甲斐はあった。うん。

あ、私が持たされた路銀は私が欲しいもの買う時に使え、って何か次元切り裂いたっぽいところにぽいと片づけて、呪文みたいなもの教えてくれて。これが私の荷物の収納場所の暗号みたいなものだから覚えとけて。：ロッカーと鍵みたいだ。

この時、この人きつとただものじゃないんだろーなあと考えたけど、実際ただものじゃなかった。

魔物も獣もこの人見たら逃げてくし、夜盗とかはてんで相手にならないし。強いなのなの。

で、一応私にも戦える技術を教えてくれて。

こんな世界だから覚えておく方がいいってことで、体術とか剣術とか槍術とか棒術とか。あんまり身につかなかったけど、護身術程度は身についたからよしとするって言われた。

でも魔法はどうやら相性がよかったらしい。吸収率半端ないって言われた。半年も経てば世界で三つの指に入る魔法の使い手だって呆れたように言われるようになった。

魔法は面白かった。

いや、壊したり殺したりするのは怖かったし嫌だったけど、ここで生きていくためにはそうしなきゃいけなかった。割り切ることを覚えた。そうじゃないと私が死ぬ。

だから面白かったのは新しい魔法を覚えること。そして編み出すこと。

こんなんできたーって見せたら感心されて凄いつて褒められるのは嬉しかった。一緒に新しい魔法考えるのも楽しかった。

そんなこんなで一年。

黒い天使様の正体をひょんなことで知りました。

なんとまあ、黒い天使様は魔王様の弟君でした。ええ。

何でもお父さんが魔王だった頃、王位継承とかで揉めて。継ぐ気はないのに兄からは目の敵にされて。よいしょしてくる人達は鬱陶しくて。もうやってられるかって城を出たらしいです。で、ふらふらっと世界を旅してるんだとか。

…大変だったね。城にいた頃のあれやそれやを聞いて、思わずぽんと肩を手で叩いてしまった。

で、今、ほら、勇者が召喚されて、魔王退治ーって話になってるでしょう？でも魔族達の中では今こそ魔王を倒して王位に就けー。そして勇者と和解してーとかって話になってきたみたいで。

お兄ちゃんの暴走らしいのよね。横暴な政治して、国民に迷惑かけてるの。人間社会と一緒にだね。

私に正体がばれたのはそのせい。

懇願にきた魔族さんと懇願されてる同行者を見ちゃったからです。凄かった。土下座してたのが、今度は足に縋りついてお願いです！後生ですー！！って泣いてた。凄かった。

何かね、人間にはこの世界は自分達のものって考えが根底にあるから、魔族を害為す者って思ってた。滅ぼす時を虎視眈々と狙ってるんだって。だから魔王の横暴政治は人間に魔族を滅ぼす絶好の口実を与えちゃったんだって。

ああ、そりゃ必死になるよね。

思わずがんばれがんばれ、フレーフレーって魔族さんの後ろで応援しちゃった。裏切り者！って顔された。後で逆襲されました。

……うん。言いたくない。すごい恥ずかしかった。あの男、恥というものを知れ。

でもほら、やっぱ故郷でしょ？それに継承争いが嫌で国出ただけで、国が嫌いなわけでもないから結局頷いちゃって。でも私も一緒に条件つき。

うん。そりゃね？一緒にいるうちに好きになっちゃいましたとも。恋人になっちゃいましたとも。でもねえ、出会って一年で妃の肩書はいらない！まだ早いから！婚約者ひとつとびしたよ！？

そんなこんなで魔族の国に帰りました。魔王様と戦いました。二人で。

だってほら、私も魔法使えるし。戦えるし。終わった後、二人揃って返り血浴びてたのはシニールだった。同行者は黒い服だから目立

たないけど、肌白いから顔についた血は目立った。

私は何でだ。白い服を着てた。何を考えてた私。いや、私が着る服は毎朝同行者が決めるから、彼が何考えてた。何も考えてなかった。絶対。真っ赤に染まった服見て、しまったって顔してたし。

その日から同行者は魔王様になりました。私は魔王妃様になりました。

何か最強夫婦万歳とかいうくす玉作られた。なにあれ。最強夫婦ファンクラブ会員一同ってなに。

で、半年。

勇者一向の旅は一応把握してた。世界中の鳥の目を通して追ってた。水晶玉に映るようにした。好きな時に見てねーって感じで。

で、見てて思ったけど、ハーレム要員増えてるよおい。元々いた姫と巫女と剣士と魔法使いの他に、盗賊と踊り子が。おまけに行く先々で美人のパトロン捕まえてるし。こっわいな、竜也。あれ無意識だから余計怖い。何かの呪いじゃないの。

それで勇者一向がどうやら廃墟になった神殿に伝説の装備のひとつ、伝説の盾をとりに行くっていうんで、じゃあここで話し合いにいかっか、ってことになった。

国の弱みはいっぱい探って握ったし。王様はいっぱい脅したし。後は勇者一向を止めれば万事解決。

え？話し合いはちゃんとしたよ？梨のつぶてだったから、最終手段使っただけで。あくどいこといっぱいしてた神聖国家とやらが悪い。

初めは魔族の言うことなんて誰も信じないーみたいな態度だったから、神聖国家の同盟国の中でも一番大きい国に教えちゃったら、うちの国に協力してくれた。弱み教えてくれてありがとーって言われ

た。

その国からも脅されて、ようやく危機感感じたらしくて。ちゃんと話し合いとをしてくれた。書面にも残した。

でも勇者一行は止められない、とか馬鹿言った。

まあ竜也に世界を救ってくれとか言ったからね。魔族は敵、魔王は世界を滅ぼすとか言ったからね。いきなり和解しましたーって誰も納得しないよね。正義感強い勇者は特に。

なので直接対決。

……前フリ長かったね。

てなわけで、何か再会早々説教かまされました。

「……竜也、お説教長い」

「あんな置手紙置いていなくなるお前が悪いんだろ！」

私のせいかな？

いや、まあ、姿見せようと思えば見せれたのに見せなかったんだから私のせいともいえるか。

でもなあ。竜也の後ろで殺気立ってるお姉様方。あの中の四人が元凶だよ？ダーリンが拾ってくれなかったら死んでたよ？

……ダーリン。こっばずかし！でもちょっと続けてみよう！んでもって本人に向かって言ってみよう！上手くいけば一矢報いてやる！毎回恥ずかしいのが私だけってのが納得いかない！

「で、今までどうしてたんだよ」

「えー？世界中旅してた」

「旅？」

「うん。いろんなところ行った」

「俺もいろんなところ行った」

「勇者だもんねえ」

お説教が終わったんで、正座してた足を崩す。しびれはない。慣れた。

いや、だって何でか知らないけど、魔王城で茶道はやっててさ。どこがツボだったんだ？分かんないけど、正式なもの知らないから

お遊びなんだけど、正座してお茶回し飲みするの。畳まで作りやがった。

でも畳はいい。ほっとする。私室の一角にも置いてもらった。そこでダーリンとごろごろするの。何かまったりしていい感じ。彼もどうやらお気に入りらしい。日向ぼっこしてる猫みたい。可愛い。

しびれを訴えることもなく立ち上がった私を怪訝そうな顔で見た竜也が疑問を口に出す前に、踊り子と盗賊がその腕に抱きついた。
……胸でか！いや、ハーレムさん皆でかいけど！竜也の腕が埋もれてる。なにあれ羨ましい！竜也も羨ましいけどお姉さん方も羨ましい。

いやいやいや。待て私。これは口に出すな。出したらダーリンが何言い出すか。確実に大きくしてやろうかとか言うから！ベッドの上だけじゃなくて日常でも揉みかねないから！嫌じゃないけど嫌だ！矛盾じゃない！これは断じて矛盾じゃない！

「竜也く。誰、これ」

これ呼ばわりかい。

「ああ、幼馴染の凜だよ」

待て。胸に腕埋まってるのスルー？

「くす。あら、可愛らしい幼馴染さんね」

あ、馬鹿にされた。

「お久しぶりですわね」

アンジェリカ姫はお怒りですか。そうですか。

「突然姿を消されたので心配いたしましたわ」

心配そうに首傾げられても目が裏切ってるよ、巫女リリアン。

「戦いを知らない女の子が魔王退治なんて、怖くて逃げだしても当たり前だったわね。気づかなくてごめんなさいね」

本当にね。剣士のモニカさん。

「でも、リュウヤの幼馴染なら、リュウヤを支えてあげてほしかったわ」

竜也は私達が支えるのよ。あなたはいらないのって言ったのあなたですよね、魔法使いのミリーさん。

「相変わらず性悪で安心しました。色惚け婆、じゃないや、お姉様方」

ぴしっという音がした。

ついうっかり口が滑った。

…あれ？全文ダメじゃないか？これ。

「性、悪？」

「色惚け、婆？」

私を追い出した四人のお姉様方の口元がひくついた。

後の二人は大笑い。それをお姉様方が睨みつけるけど無理。効果なし。

「こら、凜。何てこと言うんだ」

女性に失礼だろう。

竜也が嗜めれば、アンジェリカ姫が目を潤ませて、リュウヤ様！って泣きながら抱きついた。盗賊を突き飛ばして。

「わ、わたくし、本当に心配しておりましたのよ？ ですけど、あのような…」

うっわ。鳥肌立った。

思わず腕をさすると、踊り子が面白そうに私を見た。何だ。首を傾げれば、何故か竜也の腕を離してこちらにくる。後ずさったのは仕方がない。

「リュウヤ様！ いくらリュウヤ様の幼馴染でも、私達の心を踏みにじっていい理由にはなりません！」

酷いです！ って踊り子が離れた隙に走って抱きついたリアンも、出遅れたって顔したモニカもミリーも、突き飛ばされてアンジェリカを睨みつける盗賊も今はどうでもいい。

すみません、姫、とか。後でよく言って聞かせますから、とか言ってる竜也もどうでもいい。何で近づいてくんの？ 踊り子さん。

踊り子は私の前で足を止めると、ふうん？ と言いながら上から下まで眺めて、ついつと綺麗で長い指で顎を掬った。

なんだ。これダーリンがやったらキスされるって思うんだけど、さすがにないだろう。何だ本当に。

「あなた、リュウヤの恋人？」

「ただの幼馴染、ですけど」

「じゃあ、元の世界で恋人いた？」

「いいえ、全然」

むしろ竜也の幼馴染ってだけで男は寄ってきませんでした。

顔が良くてもてる男を幼馴染に持ってるんだ。理想は絶対高い。そう思われてたらしい。

挙句に、あんなに近くにいるんだから、絶対竜也のこと好きなんだろうとかも思われてたらしい。何でだ。

踊り子さんは、へえ？とか言いながら顔を近づけてくる。

うっわ。美人。いや、ダーリンで分かってたけど、美人って近づいても美人だ。ってか、胸！胸当たってる！柔らかい！ちくしょう！やっぱりこれくらいとは言わないけど、もうちょっとほしい！ダーリンにばれないように誰かに他に胸大きくする方法ないか聞いて回ろう！うん！

「でもあなた、男知ってるわよね？」

わあお、爆弾発言。

きゃいきゃいうるさかったハーレムが静かになった。

踊り子は顎を支えた指を動かして私の頬をなぞって首筋をなぞって鎖骨を撫でた。

「大事に大事にされてるわね。とっても愛されてるわ」

「うひゃあ！？」

ボンッと顔が真っ赤になる。

いや、分かってる！知ってた！でも他人から指摘されると凄い恥ずかしい！！

そんな私に踊り子が微笑ましそうに笑うと、曲げていた背中を伸ばして離れた。

「いい人と出会ったのね」

「は、は、い」

何だ。いきなりいいお姉さんになったよ、踊り子さん。

あれか。恋敵認定を外されたからか？

でも向こうのハーレムは嫌な顔してる。体売ったのかみたいな、すごい見下す顔。嫌悪を浮かべた顔。踊り子さんの顔と全然違うんだ。

もしかしてさっきの、馬鹿にされてなかったとか？私の被害妄想？

「凜」

「ほえ！？」

ひっくい、ひいひいひいひい声で名前呼ばれた。怖っ！

声の方を向けば竜也。何だあの顔。すごい怖い。何で怒ってんの？

お姉さん方をそっと引き剥がしてこっちにくる竜也に逃げ出したいくなった。

でも踊り子さんが後ろから抱きしめてきた。ちょっとほっとした。

…いや、これ逃げらんない？

「凜」

「な、なに？」

「今まで旅してたんだよね？」

「う、うん」

「本当に？」

「うん」

「一人で？」

「ううん」

カッと竜也の目に鮮烈な光が走った。

怖っ。これすごい怖っ。魔王が私見て、何だその女はペットかペ
ットとしても役不足な顔と体だなとか言った時マジ切れしたダーリ
ンに比べたら全然怖くないけど、怖い。

なんだなんだ。

お姉様方も戸惑ってる。思わずすり寄った踊り子さんだけが訳知り
顔だ。

「男？」

「うん」

「知らない人についていくなって教わっただろ！？」

教わったけど、でも地獄に仏な存在だったんだよ？それにいまや私
の旦那様だし。

大体、あの時差し出された手を掴まなかったら私、どうなってたか
分かんないのにさ。

ちゃんと置手紙に書いたじゃん。強制されて書きましたみたいな文
さ。ならその後だって分かるでしょ？何でいなくなったとか。

読んでないとか？それとも何。言いくるめられた？どっちにしろム
ツとするんですけど。

「どこの男に何された！？」

「…何怒ってんの？」

「何って、普通怒るだろ！？幼馴染がどこの馬の骨とも知れない男

にって聞かされて笑ってられるか！」

「馬の骨え！？うちのダーリンに向かって何その暴言！！」

「ダ、ダーリン！？何言ってるんだお前！」

「ダーリンはダーリンでしょーが！」

「その男から逃げてきたんだろーが！」

「はあ！？」

何それ！？逃げてきた！？はあ！？

目を大きく見開くと、違うのか？と竜也が目を見開いた。いや、何であんたが見開くの。

「だから戻ってきたんだろ？俺のところに」

「戻るって何さ」

「何さって」

「用事があったから会いにきただけなんだけど」

「え…」

何だ、その傷ついた顔。

え、何。

思わず踊り子さんを見上げれば頭を撫でられた。うわあい…じゃない！何でいきなりこんな扱いになったんだ。踊り子さんの中で何が起こった。

「リンちゃん、だったわね」

「へ？あ、はい」

「恋人さんは一緒じゃないのかしら？」

「一緒の予定だったんですけど、土壇場で仕事持ってきた人が足にしがみついて離れなくて」

顔蹴られても離さなかった。

血と涙と鼻水が凄かった。

ダーリンはドン引きしてた。私もした。

にーがーしーまーせーんーよーしーってひっくり声震わせながら、イヒヒヒヒヒって笑ってたのが怖くて、先行くね！ってダーリン置いてきました。

待て！こら！裏切り者！！って声が聞こえたのはきつと気のせい。

絶対気のせい。

……………後でまたお仕置きされる。

「あら？旅してたんでしょう？仕事何してるの？」

「今は彼の故郷に定住してます。仕事は主に書類仕事です。たまに現場出るけど」

「へえ。忙しいのね」

「いや、そうでもない」

仕事大好きな側近がいるから、こっそりそっちに仕事回してるから、一国の王としては暇な方だと思う。

継ぎたくないのに継いだんだから、必要最低限だけ働く。優先は俺の時間と凜の時間。とダーリンはのたまいました。私も賛成しました。

いや、だって一年も二人っきりで旅暮らししてたんだよ！？二人っきりの時間とか、自由時間減るの嫌。

「凜」

「なにさ」

「お前、その男に騙されてるんじゃないのか？男に免疫ないだろ」

「お・ま・え・の・せ・い・だ・っ」

どごとと腹を蹴ってやった。

ぐほつと体を折り曲げてうずくまった竜也に、お姉様方が駆け寄る。

「リュウヤ様！大丈夫ですか！？」

「ちよつとあんた！リュウヤに何すんのよ！！」

「野蛮ですわ！」

「暴力に訴えるなんて最低ね」

「それでも幼馴染なの！？」

うっさい色惚け婆。

思わず睨みつければ誰もが蒼白になった。

あ、まずい。対魔王モード入ってた。

対魔王モード。それはあれだ。思い出すだけで凶悪な気持ちになる。だってあの魔王、人のこと貶したくせに、形勢不利になった途端、私に妾にしてやるとか。可愛がってやるとか。発禁発言とかしてきただよ！？だからこっちにつけていってきたんだよ！？気持ち悪っ！思わず気絶しそうになったのは仕方ないと思う。

でもそれがただでさえマジ切れしてたダーリンをさらにキレさせて。魔王どころか大魔王降臨って感じだった。ダーリンは一人で世界を滅亡させられる。うん。

私も気絶しそうな心境を過ぎたらプチッと何かがキレて。ダーリンと一緒に大暴れした。

視線だけでも人を殺せますね！よっ、凶悪夫婦！ってその場から逃げ遅れた魔族が言ってた。

「言っとくけど、騙されてないから」

「そ、んな、こと、わ、かる、かよっ」

「うるさいなあ、もう。いいじゃん、ようやく私にも春がきたんだから」

「よくない！」

「好きな人と一緒になって何が悪い！」

「はしたないこと言うな！」

「はしたない！？」

結婚したことがはしたない！？

「そんなこと大っぴらに言うようなヤツじゃなかっただろ！？」

「意味わかんない！」

「やっぱりつきあう男が悪いんだ！別れろ！戻ってこい！」

「はああ！？ふざけんな！誰が別れるか！！！」

何言ってるのこいつ！

わけ分かんないこいつ！

「大体お前は俺の幼馴染だろ！？何でそんな男の側にいるんだよ！」

頭湧いてんの！？こいつ！！

「私は煌ことうのものなんだから、煌の側にいるに決まってるでしょうが
！」

「合流してすぐにそんな熱烈な台詞が聞けるとは思わなかったな」

……………。

……………。

……………わお。

聞こえた声に顔を向ければダーリン。当代魔王煌様がいらっしゃった。

服が出てくる前と違う。あの後何があった。涙が涎か鼻水か血か。それとも全部か。

「着替えは洗濯籠に？」

「使い物にならなくなったからゴミ箱行きに」

……………何があった。

煌が歩いてきて踊り子さんの腕の中にいる私を自分の腕の中へと移動させる。そして耳元で。

「お仕置きは何がいい？」

ですよー！！

にっこりと笑っても分かります。よくも置いていきやがったなって思ってますね？ええ、私も同じ状況だったら絶対思います、はい。

「愛してるわ、ダーリン」

「俺も愛してるよ、ハニー」

……っ！！

顔が真っ赤になった。

くわ！くわ！くわああああ！！！！！！

誤魔化そうと思ったのに！

いきなりのダーリン呼びに意表ついて忘れさせてやれって思ったのに！

まさかの！まーさーかーのっハニー呼び！！

「~~~~~っ」

声にならない。

でも悔しい。恥ずかしい。嬉しい。どんどん、と拳で胸を叩いてやる。

それをくすくす笑いながら、ぽんぽんと背中を宥めるように叩いて

くる。可愛い、とか言うな。

「凜！」

また竜也の声。

同時にとんとと煌が地を蹴って後ろに下がった。空振る音。振り向けば、さっきまで私達がいた場所に竜也がいた。

「お前、凜を離せ！」

「は？」

だから何言ってるの。見てたら分かるでしょうが。っていうか私言ったでしょうが、ダーリンって。煌だってハニーって返したでしょうが。ハニー…っ、くっ！もう一回って言ったら言ってくれるかな…。

「離す？俺のものを抱きしめて何が悪い」

「凜はものじゃない！」

「物扱いしてるわけじゃないんだが」

「そいつは俺の幼馴染だ！返せ！！」

煌が眉間に皺を寄せた。

私も眉間に皺を寄せた。だってハーレム要員のお姉様方が煌に見惚れてるんだよ。頬赤らめてるんだよ。んでもって私を射殺さんばかりに睨みつけてくるんだよ。

…何それ。確かに煌は綺麗だしカッコいいけど、さっきまで竜也様竜也様言ってたくせに。何、美形なら誰でもいいわけ？最低。

思わず蔑んだ視線を返す。多分殺気も込めた。お姉さん方の顔色が真っ白になった。これで魔王倒す気だったの？はんっ。…ああ、何

かやさぐれてきたぞ。

「返せ、ね」

「何だよ！」

「凜は俺の腕の中がいいって言ってるのに？」

「ふざけんな！」

「ふざける？なら凜の手はどこにある？」

「…っ」

煌の背中にあります。ぎゅっと抱きついてます。んでもって、お姉様方の視線がむかついたので、胸に頭を擦りつけてます。ここでキスして？って言えばしてくれるでしょう。公衆の面前は嫌だから言わないけど。

「凜！こっちこい！」

「や」

「凜！？」

煌の手が腰をいやらしく撫でたので、脛に蹴りを入れる。ぐって聞こえた。時と場合を考えましようね？ダーリン。

「あのね、竜也。私の旦那様」

「は！？」

「だから旦那様」

「……はあ！？」

「そういうわけだ。妻が夫の腕の中にいるんだ。可笑しくはないだろう？」

竜也の目が大きく大きく見開かれた。嘘だって声が擦れてて。まだ私十七だもんなあ。十六から結婚できるとはいえ、まだ早いつ

て思うよね。高校生だし。

でも人妻なんですよ。妃の肩書早い！！って言ったけど、好きな人の奥さん名乗れるんだから、まあ、うん。嬉しくもある。

「まさか！有り得ませんわ！」

……懲りないな、アンジェリカ姫。

「そうよ。こんな上等な男、捕まえられる器量じゃないでしょう！普通、旦那名乗ってる男前にして言うかな。」

「城から出て一年と半年でしょう？どんな卑劣な手をお使いになられましたの？」

うっわ。ううわ。

「体で誘惑でもしたんじゃないの？貧相な体だけど！」

その貧相な体に欲情する男を前によくも言った。

「どこまでも最低ですね。違法の薬か術でも買い求められたのではありませんか？」

ほう。つまり薬や術で操ったとか？それともそれ使って体の関係作って責任取らせたとか？

あ、踊り子さんが顔しかめた。竜也は相変わらず呆然としてる。そこまで驚くことなのか。

「これが勇者一行？国どころか世界の恥だな」

「ダーリン、きつつい」

「本当のことだろうか？ ハニー」

まあ確かに。

これで魔王倒すぞー。

世界救うぞーって言ってたんだもんね。

世界に明るみになくてよかったね。

魔族が煌に懇願してよかったね。

煌が魔王倒してよかったね。

きゃんきゃんうるさいお姉様方は、煌の侮蔑の視線に固まった。

その間に踊り子さんがごめんなさいね、って謝ってくれた。いいんです。踊り子さん。何か本当いい人ですね。惚れそうで…っ。

「惚れません」

「よし」

一瞬不穏な気配が煌からした。

危ない。気づいてよかった。気づかなかったらここで押し倒された、絶対。

「見たところ、あなたが一番冷静に話ができるようだ。私は煌。先程も言ったが凜の夫だ」

あ、お仕事モード入った。

「私はアリア。旅の踊り子です。治癒魔法を得手としますので、勇者様方に同行させていただいております」

ああ、巫女リリアンは治癒魔法苦手だもんね。ただいけば世界各地の神殿で融通利かせてもらってるっていうお得な手形だけで。いや、それもそれで凄いいけどさ。あ、確か精霊も使役できるってきいたな。旅の間にも精霊使役する野盗いたけど、その精霊も煌見たら逃げたから、煌相手には役に立たないけど。

「彼らにはあなたから話していただけるとありがたいのだが」

「決定権は勇者様にありますので、私は話を聞くことしかできませんが、それでもよろしければ」

「ああ、十分だ」

煌が小さく呪文を唱えた。

不思議そうな顔をした踊り子さん、アリアさんに私が説明する。

「すいません。この周辺の音を散らしたんです。お姫様達が聞いたら、うるさくて話進まないんで」

「ああ。そういえばそんな術があったわね。でも聞こえないなら不審に思うんじゃない？」

「大丈夫です。精霊が適当に声真似使って話してくれるので」

「え？」

「前もって精霊に頼んでおいたんです。竜也達と話すのに風で散らすのは決めてたので」

それがアリアさんだけに計画変更になった。

そう言えばアリアさんが、ああ、と苦笑した。

「用件の方だが」

煌がまず旅に出た理由を話して、私との出会いを話して。そして身分を明かして、魔王になった経緯。そして神聖王国と結んだ条約の

ことを話した。

アリアさんは驚いて。そして息を吐くと、後ろの仲間達を見た。

「何て面倒な…」

大変申し訳ない。

「お妃様！凛様！」

「はい」

なーに？

宰相補佐が呼ぶのに返事する。でも顔は下。だって煌に膝枕してるから。んでもって耳かきしてるから。目離すなんて危ない危ない。

「はい、逆向いて」

「ん」

ごろっと煌が畳の上で向きを変える。

耳にかかった黒髪をよけて、さてもう片方を掃除しよう。

「お、お妃様！ああ！陛下まで！」

「だからなーにーってば」

「ねむい」

「こら、動かないで」

「果たし状が送られてきました！」

ぴたっと動きを止める。

煌も私の腰を抱いた手から一瞬力が抜けた

「え？私宛て？」

「陛下宛です！」

「え？じゃあ何で私呼んだの」

「お妃様をめぐつての決闘申込みです！うわっちゃ！！」

ぽつと果たし状が燃えた。

持ってた宰相補佐が可哀想でしょうが。ぺしっと煌の額を叩く。

「誰から何て書いてあったの？」

視線は宰相補佐の足元。赤い目の白い髪を肩につかない程度に伸ばして城に大きな赤いリボンをつけた幼女。

幼女、氷魚ひおは無表情で果たし状、と口を開いた。

「拝啓、魔王煌様。先日は大変結構なご挨拶をいただき、誠にありがとうございます。つきましてはお礼参りとさせていただきます、お手紙差し上げました」

「誰か分かった。分かったけど何だそれ」

「とにかくですね。お礼参りと、陛下に勝てばお妃様を返せというのがその果たし状の内容です」

「……ええ？何考えてんのさ、竜也」

竜也だ。確実に竜也だ。

煌が私の膝の上で寝返りを打ってうつぶせになる。そして膝に顔をうずめた状態で、いなくなって初めて知った大切な人、だろう、とか言い出した。

「へ？」

「ずっと一緒にいたんだろう？」

「うん」

「だからそれが当然で気づかなかったんだろう」

「何に？」

「お前が好きだって感情に」

「はい！？」

何だそれ！

本気で驚いた。

宰相補佐が、ああ、と頷いた。

「人のものになって初めて知るんですよ。そいつは俺のだったのに！とか言い出す奴っていますよ」
うんうん。

：誰それ。私知ってる人？

知らない人です。

ああ、そうなんだ。

「じゃあ、何。竜也は私のこと好きなの？恋愛感情で？」

「だろうな、とは思っていた」

「そなの？」

「お前と抱き合ったり愛してるとか言い合ったりダーリンハニーとか言い合ったりするから、思いつきり敵意ぶつけてきたんだぞ？勇者」

「何怒ってんのわけ分かんないかと思ってた」

びっくりした。

びっくりした。

すごいびっくりした。

「ダーリンハニーとか言ったんですか」
どこまでバカップル。

「ダーリンハニー」

つんつん、と宰相補佐の服の裾を引いて、無表情の氷魚が笑った。

「ダーリン」

宰相補佐が息を止めた。

そしてがっばあつと氷魚を抱きしめると、

「愛してるハニー！！」

叫んだ。

うん。ここ実は年の差ないから。

氷魚は肉体年齢自在に操れて、その中で幼い姿が一番好きだってだけだから。宰相補佐はロリコンじゃない。どんな君でも愛せる！！そんな人だから。一応婚約者ね。

「でも決闘ねえ」

「魔王退治の件は納得したんだろう」

「アリアさん、大変だったろうなあ」

「今度何か贈るか」

「うん」

何が好きかなあ。

好きなもの聞いてから贈った方がいいかなあ。

アリアさんといえば、あの後ちよつと世間話ついでに聞いてみたら、私に優しくかったのは亡くした妹が生きてたらこれくらいかなあって思ったらああなったんだって言ってた。態度変えたつもりもないって。

うん。私の被害妄想だった。

「あ、決闘って日付指定あるの？」

抱き合って好きだの愛してるだのダーリンハニー言い合ってるバカップルに声をかけると、まずはお返事待ってますってありましたと返る。

変に律儀なんだよね、竜也。

「どうする？ 煌」

「受けてもいいんだが」

「なに？」

「万が一負けたら攫って逃げるぞ」

膝から顔を上げて言った煌の顔は真剣だ。

外から見たらどんな格好でそんな発言してんのかっこ悪いよ、かもしれないけど、私には関係ない。かっこいい。素敵。

「愛してる！ ダーリン！」

「俺も愛してる、ハニー」

がばっと抱き合う。

まあ、煌は体制が辛かったみたいで、すぐにごろっと私を畳に転がした。そこで抱き合ってダーリンだのハニーだの好きだ愛していると繰り返した。

入り口では抱き合って同じようなことを口にしあってるバカカップルもいて。

たまたま通りがかった人達が、うぎ！何このバカカップル達！甘ったるくてうぎ！二組もいらねえ！うぎ！と叫ぶまで続いた。

……てか、何回うぎいって言うんだ。そんなにうぎかったのか。

そして決闘は終わった。

え？終わったよ？やあん、素敵、かっこいいダーリン！！って煌に駆け寄って抱きついてるもん、今。

君の為なら世界さえ滅ぼしてみせるよハニーって言うてください！
！陛下！！って言うてる奴は隣に立ってる人に殴られた。やめろ。
本気でできるから。この人、やる気になったらできるから。

瞬殺、ではなかった。

一応お互いに制限はあった。だって勇者と魔王が戦ったら決闘の域超えるよ？とてもじゃないけど観戦なんてできないよ？

現に前の魔王と煌が戦った時、王都中に避難警報鳴り響いてたらしい。逃げ遅れたにも関わらず、しっかり観戦して感想まで言ってきたびっくりな魔族もいるにはいたけど。

だから命は取らない決闘ってことで、使うのは剣だけ。打ち合うだけ。煌は足も使ってたけど。

竜也はあれだ。正統派の勇者だから剣一本なんだよね。剣使ってるのに足まで使えないっていうか。それってなしだろ！？的な。え？だめなの？みたいな煌に、だめだろ普通！！って言っちゃうような正統派だから。

煌は、ええ？みたいな顔してたけど、しょうがないなって足は使わ

ないようにしてたけど、つつい出そうになってやりづらそうだった。

それでも勝ちました！

かっこいい！かっこいい！私の旦那様かっこいい！！

え？キャラ崩壊？いい！ダーリンのためなら崩壊する！しても許される！だってバカップルって呼ばれてるんだから、お互いのためなら何しても許されると思う！！

まあ、そんなわけで勝負ありです。

煌が魔王だって分かった途端、揺れた心はまた竜也に固定されらしいお姉様方は必死で竜也を慰めてた。そしてかっこよかったと褒めていた。そしてそして足を使うなんて野蛮だの、卑劣だの言ってた。

そんなお姉様方にアリアさんが頭を横に振りながら、竜也に治癒魔法をかけていた。

「でも残念だったな」

「何が？」

「魔王の座を捨ててお前と逃避行ができなくなった」

「また機会があるって」

「そうか？」

「そうそう」

「逃避行！？」

がばっとうつむいていた竜也が顔を上げた。
それにうん、と頷く。

「負けたら一緒に逃げる予定だった」

「約束が違うだろそれ！」

「約束と凜なら凜を取る」

「きっぱり言い切るな！無駄にかっこよく言うな！」

叫んで。

はあっと竜也が大きな息を吐いた。そして前髪を掻き上げる。

ほう、っと竜也の仲間達がうっとりしたような息を吐いた。うん。

竜也も美形だからね。そういう仕草も絵になるよね。

「凜」

「なに？竜也」

真剣な声に振り返る。

ずっと一緒にいた時のような感覚がして、ちょっと懐かしかった。

竜也もそう思ったのか、くすりと笑った。

「好きだよ」

ぴたっと音がやんだ。

そして魔族達が自分達の主を見て、けれど何の反応もないのに不思議そうな顔をした。

でも私は知ってる。私を抱く腕に力がこもったことを。

「私も好きだよ」

「幼馴染として？」

「幼馴染として」

俺もだよ。

言って笑った竜也の顔は泣いているようにも見えた。

「で、凜」

「なに？ 竜也」

「お前の旦那、心狭くないか」

「愛されてるの」

一拍泊まって、では国に帰りますな時に、じゃあまたねーっと笑っ

て手を振った私がつまづいた。自分の足に。
何これデジャヴ。

でもまた地面に顔面激突は避けられた。ぶつかったのは竜也の胸だ。
竜也の胸の中にダイビングした。

大丈夫か？何やってんだよお前。
うっさいな。ありがと。

な、幼馴染同士の会話の後ろで、ピシッと氷が割れるような音がした。

今考えればさっさと竜也から離ればよかったんだよね。いつまでも抱かれたままだったのが悪かった。その状態で会話してたのが悪かった。顔が近かったのも悪かった。

つまり、ダーリンがキレた。

「もう一泊してく？」

「帰るわ！！」

全身びしょぬれの幼馴染。

ダーリンに後ろから抱きしめられてる私。

ほんとごめん。結婚するまで知らなかったんだけど。旅してる間は二人つきりだったから知らなかったんだけど。すごい嫉妬深いの、ダーリン。

くしゃみをした竜也に、新しい服が差し出された。

5／5（後書き）

終わりです。

…え、と期待外れで申し訳ありません。

まさかこんなに感想いただけたとは思ってなかったので、これはと話を修正してみようと思いましたが、どうしたらいいのか分からず

（汗）

とりあえず書いてないところに勇者の葛藤がありました。

幼馴染でずっと側にいて、だから無意識に自分のものだと思っていて。それが別の人のものになったことで何でどうしてな理不尽を感じて。

決闘してみたものの、戦っているうちに気持ちが整ってきて、負けたことによってすっきりして。

その結果がこの大団円です。

残った問題は彼のハーレム体質ですが。そして女性の悪いところを見れない彼の目ですが。そこは知りません。

このままじゃいつか苦労するだろうなあと思います。はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2454x/>

勇者な幼馴染にお久しぶり。

2011年10月29日13時50分発行